

観峰館

冬季本館4階展示

商家に伝わるひな人形めぐり

～春よ来い～

展示案内パンフレット



2021年2月6日(土)～3月21日(日)

* 出品作品は、キャプション左下の番号順にご覧ください。

ごあいさつ ～春よ来い～

観峰館は、毎年、東近江市五個荘で開催されている「商家に伝わるひな人形めぐり」イベントに協力しています。この展示では、3月3日の桃の節句を彩るひな人形を中心に、季節をモチーフとした作品、松竹梅などおめでたい書画作品をご覧ください。

今回は、明治時代の古今雛の流れをくむ内裏雛のほか、恒例の御殿飾りや、段飾りとは趣がことなる「十五人飾り」のひな人形を展示しています。周囲には、「書の文化にふれる博物館」らしく、貴重な書画作品が添えられています。特に、初出品となる筒井政憲「松竹梅五言句三幅対」や、個人蔵の2点のかわいい犬の掛軸など、見ごたえたっぷりの書画作品もあわせてご堪能ください。

今後も、目に見えぬ敵との戦いは続きます。色あざやかな作品をご覧ください、少しでも早い「春の訪れ」を期待しつつ、展示をお楽しみください。

春よ来い！

☆学芸員おすすめ作品のご紹介☆

(ここでしか読めないちょっとした解説です。)

No. 2 楊州周延「江戸砂子年中行事 上巳の図」 明治中期



この錦絵は、ひな人形の段飾りの前に、9人の麗しき女性が、着物を着飾り、桜の樹の下で節句を祝う様子を描いたものです。抱き抱えられたお稚児さんは、節句の主役でしょうか。

作品名にある「江戸砂子」とは、江戸時代のベストセラーで、江戸の地誌であり、江戸各地の名所風俗を記したものです。その内容が錦絵に描かれるようになり、シリーズ化されました。

段飾りに目を向けてみると、お内裏さまは古来の慣習に倣い、向って右に飾られています。二段目には三人官女と隨身、三段目に五人囃子、四段目・五段目は犬筥(犬張子)や調度品が飾られています。犬筥は、安産と子どもの成長を祝う意味が込められています。また、お雛さまと三人官女、五人囃子を合わせるとちょうど9人ですので、中央の赤い着物の女性をお雛さまと見立てて、まるで人形たちが現実の世界で宴会を楽しんでいるかのように、華やかで楽しげな様子が伝わってきます。



作者の楊洲周延(1838~1912)は、越後高田榊原藩の下級藩士の家に生まれ、文明開化で花開いた明治の風俗を、特に美人画を通して数多く描きました。江戸時代の植物性の染料ではなく、鉱物性の化学絵具を巧みに使い、本作にも見られる象徴的な鮮やかな赤色は、新しい「色」として人びとに好まれました。また、女性たちの着物の文様が細部にわたって丁寧に描かれ、和装でありながら近代的な雰囲気を与えており、まさに新しい時代の到来を予感させる作品です。

突然ですが、Q&A！ 内裏雛の左右はどこ？

錦絵に描かれる内裏雛は、左側(向かって右)に男雛、右側(向かって左)に女雛が飾られています。これは、古来の日本文化において左が上位という考え

方によるものとされます。分かりやすい例では、左大臣、右大臣では、左大臣が官職上位と決まっていた。

現代のお雛さまは、この逆、すなわち右側に男雛、左側に女雛という並びが多く見られます。この並びについては諸説ありますが、有力な説のひとつに、大正天皇の婚儀の際に、国際儀礼にならい、皇后の右側に立たれたことから、左右の並びが逆になりました。

しかし、京都や関西圏の一部の地域では、古来の並べ方を踏襲してきました。従って、この展示のひな人形は、錦絵と同じく、左側（向かって右）に男雛、右側（向かって左）に女雛、それぞれ飾っています。

ただし、No.27の御殿飾りは、昭和30年代に静岡県で制作されたもので、現代の並べ方が好ましいため、他とは逆の並べ方となっています。

No.10 筒井政憲「松竹梅五言句三幅対」 嘉永6年(1853)



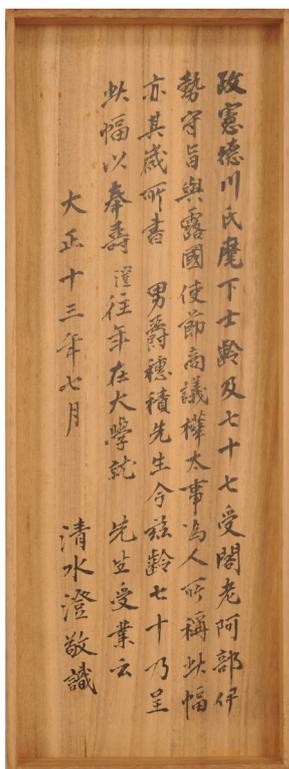
筒井政憲（1778～1859）は幕末期の旗本であり、大町奉行、長崎奉行などを歴任しました。シーボルト事件や、ロシアのプチャーチンとの交渉にあたった人物としても知られています。

この作品は、政憲が77歳の時に書いたものです。この年、政憲は老中・阿部正弘の命を受け、長崎にて、ロシアのプチャーチンと樺太・千島の国境確定と交易開始の交渉にあたりました。この書は、重厚な墨線でありながらも伸びやかさを兼ね備え、清々しい仕上がりとなっており、大任を担うことを誉に思う、政憲の気持ちを表しているかのようです。

また、引首印に「筆研（硯）三味」という言葉を選んだことも面白いものです。加えて表具をよく見ていただくと、それぞれの表具の一文字（本紙の上下にある裂のこと）に、松・竹・梅がそれぞれデザインされたものを使用していることが分かります。これは、元の所蔵者のこだわりでしょうか、この作品が大切に所蔵されていたことが伝わります。

釈文は次の通りです。

- 松高白鶴眠（松高くして白鶴眠る）
- 修竹千年緑（修竹は千年の緑）
- 梅花雪裏香（梅花、雪とともに裏香たり）



函書は、清水澄（1868～1947）が大正13年（1924）7月に記したものです。文章にある「穂積」とは、「男爵」とあることから、穂積陣重（1855～1926）であり、清水澄と弟・八束は師弟関係にあたります。筒井政憲が江戸の奉行であったことから、法制史の権威たちによって大切に受け継がれてきたもので、穂積、清水のどちらかによって、こだわりの表具にやり直されたのかもしれない。

なお、穂積陣重の妻は、渋沢栄一の娘です。2021年の大河ドラマの主人公の娘婿にあたる人物ですから、もしかすると穂積が出てくるかもしれませんね。

No.21 浅井蒼石 「筆参造化」画帖 大正時代～昭和前期

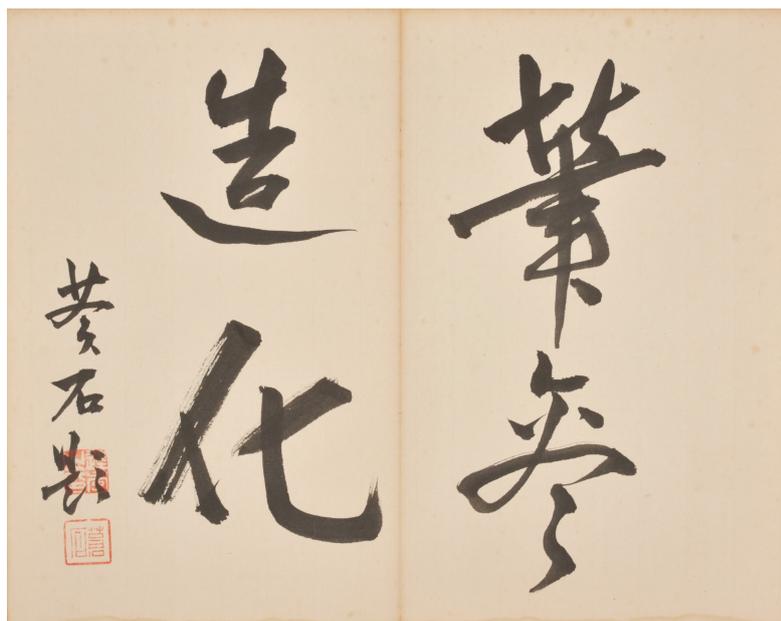


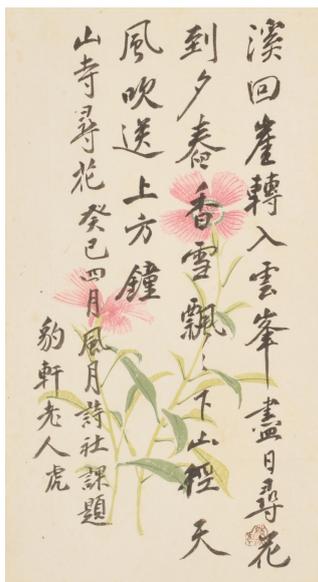
松竹梅をはじめ、桜、蘭、菊などの花々が描かれた画帖です。「筆参造化」とは、唐代の詩人である李白の言葉で、文筆が優れていることを意味します。

この画帖の外題及び題辞を書いたのは、浅井蒼石（1872～1946）という画家です。蒼石は、浅

井弥兵衛の養子で、越智東予に師事しました。浅井弥兵衛は、『兵庫県人物史』に拠ると、兵庫・龍野藩の醤油醸造場を引き受け、関西一の大醸造家となった商売人です。また師匠の越智東予は、『愛媛県史』に拠ると、愛媛県の東部・東予地方に明治26年（1893）に生まれた画家で、雅号は、彼の出身地に由来しています。蒼石の経歴については、これ以上のことは分からず、更なる調査が必要です。

画帖には、花卉類の他に、金魚や山水画などが描かれています。主題のみを丁寧に描いたシンプルな画帖で、絵を学ぶ人のテキストとして描かれたものと思われる。





この画帖の末尾には、鈴木虎雄（1878～1963）が書いた漢詩の添書が挟まれています。鈴木虎雄は古典中国文学者で、中国学の第一人者とされる学者です。漢詩人として豹軒という号を使用していました。鈴木が昭和28年（1953）、風月詩社という漢詩会にて、「山寺尋花」の題を与えられて書いたものです。ここから、この画帖が、鈴木がかつて所蔵していたものとも考えられますが、はっきりとは分かっていません。

突然ですが、Q&A！ 以前の所蔵者を調べるのは何故？

作品には、以前の所蔵者の情報が残されていることがあります。

例えば、No.3・4 小林永濯『温古年中行事』には、最初のページに「芝川文庫 図書之印」の印が押されています。この芝川さんとは、芝川又右衛門（1853～1938）のことです。又右衛門は、祖父・親助が唐物商、父・又平（初代・又右衛門）が大阪で土地経営と、それぞれ事業を行った実業家で、その子・又右衛門（二代目）は実業家であるとともに、大蔵書家でもありました。



この蔵書印によって、かつての所蔵者が分かるとともに、この作品が、いつの時代、どの地域で保管されていたかを知ることができます。『温古年中行事』は明治17年・22年に出版されたものですので、おそらく又右衛門が購入したものでしょう。『温古年中行事』は東京下町の風俗を描いたものですので、彼が実業家として、東京下町の情報を得ようとしたのではないのでしょうか。その後、何らかの理由で手離した後、古書店を経て、当館に所蔵されたものです。

私たちの仕事は、作品の内容や作者の歴史を調べるだけではありません。作品そのものが歩んだ歴史を調べることも、とても大切な仕事なのです。

2021年2月6日印刷・発行
編集 公益財団法人 日本習字教育財団 観峰館
所在地 〒529-1421 滋賀県東近江市五個荘竜田町136
TEL 0748-48-4141 FAX 0748-48-5475
<http://www.kampokan.com>